

Title	ボーヴォワールへの現代日本の視線： フェミニズム思想の再発見と継承
Sub Title	Regards japonais sur Simone de Beauvoir aujourd'hui : redécouverte et transmission de sa pensée féministe
Author	西尾, 治子(Nishio, Haruko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.74 (2022. 3) ,p.115- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ガボリオ・マリ教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20220331-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ボーヴォワールへの現代日本の視線

——フェミニズム思想の再発見と継承——

西 尾 治 子

2021年12月10日、日仏女性研究学会 SFJEF¹⁾ は、日仏シンポジウム「ボーヴォワールへの現代日本の視線 Regards japonais sur l'œuvre de Simone de Beauvoir」(オンライン・同時通訳付き)を開催した。シンポジウムを開催するきっかけとなったのは、今年の7月に、これまでに刊行されることのなかったシモーヌ・ド・ボーヴォワール(1908–1986)の自伝的小説 *Les Inséparables* の日本語訳『離れがたき二人』が出版されたことであった²⁾。プログラムは、ボーヴォワールの著作権継承者であるシルヴィ・ル・ボン・ド・ボーヴォワール Sylvie le Bon de Beauvoir 氏の基調講演およびボーヴォワール研究の専門家などの5名の女性たちの発表から構成された。当初は日仏会館・フランス国立日本研究所およびアンスチチュ・フランセ(在日フランス大使館)と本会が開催する小規模の催しの予定であったが、企画の策

- 1) 日仏女性研究学会(日仏女性資料センター): <https://sites.google.com/view/sfjefemmes>
- 2) 原著: Simone de Beauvoir, *Les Inséparables*, Éditions de l'Herne, 2020/7/10
アメリカや英国では、原著が出版されるとすぐに、次のような翻訳版が刊行された: Simone de Beauvoir, Margaret Atwood 他, *Inseparable: A Never-Before-Published Novel* (English Edition), Ecco, 2021/9/7, Simone de Beauvoir, Deborah Levy 他, *Inseparable: A Never-Before-Published Novel*, Vintage Classics (UK), 2021/9/2, Simone de Beauvoir (著), Deborah Levy (序論), Lauren Elkin (翻訳), Sylvie le Bon de Beauvoir (あとがき) *The Inseparables: The newly discovered novel from Simone de Beauvoir*, Vintage Classics, 2022/6/2

定の段階で東京カレッジ（東京大学）が主催者として加わり、ボーヴォワールの専門以外の研究者およびフェミニズム書店の経営者が登壇、同時通訳付きのウェビナーで日本とフランスをオンラインで繋ぐこととなった。フランスとの時差を考慮し、夕方の17時から開始したシンポジウムには251名の視聴者を得た。3時間に及んだシンポジウムは、一時的に日仏間の回線の接続状況が思わしくない場面もあったが、終始、高揚した雰囲気の中に進行し、充実した内容の発表の数々に参加者の方々から多くの質問や好意的な感想が届き、成功裡に終了した。

本報告は、シンポジウムで発表された講演および発表内容の紹介を目的とする。多様な視点からのボーヴォワールの著作および生涯に関する考察を通して、作家ボーヴォワール像さらに登壇者の現代フェミニズムに対する姿勢および日本の女性たちを取り巻く状況を浮き彫りにすることが出来れば幸いである。

はじめに

現代フェミニズムの創始者であるシモーヌ・ド・ボーヴォワールは、1983年、日仏女性研究学会の設立時に署名をして下さった。つまり、本会創設の賛同者ということになる。また、会員の中にはボーヴォワールの『第二の性』など主要著書の翻訳者を嚆矢とし、ボーヴォワールの哲学や文学研究の専門家のほか、そのジェンダー思想や生き方に多大な影響を受けた女性たちが多く存在する。したがって、ボーヴォワールと日仏女性研究学会（日仏女性資料センター）とは縁が深いと言えるだろう。

『第二の性』はボーヴォワールを一躍世界の著名人にしたが、『第二の性』の日本語訳の改訂版³⁾が出版されてから20年が経過した現在、若い世代にはボーヴォワールの名前すら知らない人たちも多くいるという。第二波フェ

3) 初版の日本語訳を修正し刊行された『決定版 第二の性〈1〉事実と神話』および『決定版 第二の性〈2〉体験』（井上たか子、木村信子、中嶋公子、加藤康子監訳、新潮文庫、2001）は、日仏女性研究学会のボーヴォワール研究を専門とする女性会員たちの手により翻訳された。

ミニズムの熱気と興奮が渦巻く当時のボーヴォワール現象を経験した世代にとって、このような状況は、日本のフェミニズムの発展上、危惧すべきゆゆしきことに思われる。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、フェミニズムの歴史の上で「20世紀の学問のパラダイム転換」を成し遂げた偉大な哲学者であり作家だからである。そのボーヴォワールのジェンダー思想と文学、生き方を再発見し、それを未来の世代に繋げてゆく好機とすること、これが今回のボーヴォワール・シンポジウムの目標としたことの一つであった。

以下に、そのシンポジウムで発表された講演および発表の内容を、(Ⅰ) 基調講演 (Ⅱ) ボーヴォワールとその著作 (Ⅲ) ボーヴォワールと現代社会の順に紹介したい。

(Ⅰ) 基調講演 Sylvie le Bon de Beauvoir

« *Les Inséparables et l'oeuvre de Simon de Beauvoir* » (『離れがたき二人』とシモーヌ・ド・ボーヴォワールの作品)

シルヴィ・ル・ボン・ド・ボーヴォワール氏の講演の主題は、自伝的小説 *Les Inséparables* およびボーヴォワールの生涯についてであった。

Les Inséparables は、本シンポジウム開催のきっかけを作った小説である。ボーヴォワールが1954年に執筆した作品だが、その後、日の目を見ることなく放置されたままとなっていた。ところが、昨年(2020年)5月にL'Herne社がこれを出版すると、その後すぐにイギリスやアメリカで英語訳が刊行され、日本では今年7月に『離れがたき二人』となって早川書房から邦訳版が出版された(関口涼子翻訳)。『離れがたき二人』はボーヴォワールが小説『レ・マンダラン *Les Mandarins*』⁴⁾でゴンクール賞を受賞したばかりの頃に執筆した作品で、女性たちに自由や考えることを許さず彼女たちを良妻賢母の役割に閉じ込めようとする世界に「反旗を翻す」2人の育ちの良い少女が性と知について学び成長していく姿を描いた自伝的小説である。

4) シモーヌ・ド・ボーヴォワール著『レ・マンダラン』、朝吹三吉(翻訳) in 『現代世界文学全集 第45-46』新潮社1956 (*Les Mandarins*, 1954)

ボーヴォワールの一連の自伝的作品としては、『娘時代 *Mémoires d'une jeune fille rangée*』(1958) (1960)⁵⁾『女ざかり *La Force de l'âge*』(1963)⁶⁾『おだやかな死 *une mort très douce*』(1964)⁷⁾『決算のとき *Tout compte fait*』(1972)⁸⁾が挙げられるが、そのうちの一遍に数えられる。

『離れがたき二人』は、エリザベート・ラコワン（通称ザザ）を實在のモデルとしており、ザザは物語の中ではヒロインのアンドレ・ガラードに、ボーヴォワール自身はその女友達のシルヴィ・ルパージュとなり語り手として登場する。シモーヌが学校でザザと初めて会ったのは、9歳の時だった。シモーヌと同年で褐色の短髪のザザは、天衣無縫で社会の因習をバツサリ切って捨てる勇気があり、生き生きとした知性と多彩な才能をもっていた。シモーヌはザザに魅了され、夢中になる。こうして二人は学校の成績で、1、2位を争い、離れ難き二人となってゆく。しかし、シモーヌは、パリのブルジョワの良家に生まれたものの、第一次大戦で一家が破産したお陰で、ブルジョワ階級から脱落し女性の「運命」である結婚から逃れ経済的自立を遂げることができたのに対し、ザザの方は、過激なカトリックのブルジョワ家庭の両親が彼女に押し付ける厳格な規範と軋に抗しきれずに押し潰されていく。シモーヌは14歳で信仰を捨てていた。一方、ザザは従兄弟との恋を断ち切られ、20歳で恋したパスカル・ブロンデルとの結婚も家族に容認されることはなかった。そして、ウイルス性脳炎による死が、突然、21歳のザザを襲う。小説の第二部が明らかにしているように、実際には病気というより拒食症やアルコール、薬物中毒、自傷行為、自殺衝動によってザザ自らが招いた死でもあった。

ル・ボン氏は、ザザの父親が娘の葬儀で放った「我々は神の手の間では道

5) シモーヌ・ド・ボーヴォワール（著）『女ざかり—ある女の回想』朝吹登水子、二宮フサ（訳）紀伊国屋書店 1963 (*La Force de l'âge*, Gallimard, 1960)

6) Simone de Beauvoir, *Une mort très douce*, Gallimard, 1964.

7) 『娘時代—ある女の回想』朝吹登水子訳（1961）(*Mémoires d'une jeune fille rangée*, Gallimard, 1958)

8) シモーヌ・ド・ボーヴォワール（著）『決算のとき』朝吹三吉、二宮フサ（訳）紀伊国屋書店 1973–1974 (*Tout compte fait*, Gallimard, 1972)

具に過ぎないのだよ」という言葉にボーヴォワールは激しく反発しているという。アンドレの墓は白い花で覆われていた。白い色や「潔白」は、ボーヴォワールにとって、フランスのブルジョワ社会の因習や庶民の属する社会階級の価値判断に対し「超自然のオーラをまとわせる欺瞞」そのものを象徴している。白はアンドレ（ザザ）の人生における生身の愛と欲望を「漂白」するカラーであり、アンドレはこの白さに窒息して死んだのだ。ル・ボン氏は、この白さは「否認、死を招く抑圧、神秘化」であり「精神論の犯罪」であると指摘された。『離れがたき二人』の最後で読み取られるように、これらの否認、死を招く抑圧、神秘化により、目に見えない「白の殺人」が見事に成し遂げられたのである。

1929年、こうして、ザザとシモーヌとの唯一無二の「シスターフッドの物語」は幕を閉じる。ザザの死については、次の発表の中村彩氏の引用にあるように、ボーヴォワールは「ザザの死の代償として私は自分の自由を勝ち得たのだ、私は長い間そう信じていた」と『娘時代 *Mémoires d'une jeune fille rangée*』に書き残していることに、ル・ボン氏も言及された。換言すれば、この獲得された自由とは、シモーヌ独りに留まるものではなく、すべての女性たちのジェンダー規範からの自由と開放を意味しているのであり、『離れがたき二人』はこのことを読者に伝えていると言えるのではないだろうか。

『離れがたき二人』の解説の後、ル・ボン氏は、ボーヴォワールの作家としての生涯について概説された。ボーヴォワールは哲学と文学に境界線を設けず、自らの哲学思想を小説、自伝的思索、エッセイなどに具現化した。「永遠の女性、フェミニン」は「有害な神話」に過ぎず、女性として生まれた人間の存在を規定するような女性の本質や性質などは存在しない。「存在は本質に先立つ」という言葉の延長線上にある「人は女に生まれるのではなく、女になる」という一文がボーヴォワールをフェミニズムの理論家として確立した、と氏は強調された。

ボーヴォワールは、女性は「運命」にではなく、置かれている「状況」に苦しんでいる、と指摘した。このボーヴォワールの言説は、ル・ボン氏に日

本の森ガキ侑大（もりがきゆきひろ）監督の映画『坂の途中の家』に描かれている女性の極限状況を思い起こさせたという。『坂の途中の家』は、直木賞作家・角田光代のベストセラー小説をドラマ化したものであり、ル・ボン氏はザザが経験する極限状況に重ね合わせ、日本とフランスに共通する女性を取り巻く状況に近似性を見出したと言えるだろう⁹⁾。

政治的側面では、ナチスによるフランス侵攻、5年間の占領下での悲惨さや物資の欠乏、強制送還、レジスタンスの戦い、拷問や処刑、これらの人間の歴史における重大な汚点がシモーヌ・ド・ボーヴォワールの世界観を根本的に変えたが、彼女が政治的な運動に参加するのは戦後になってからであった。プライベートの側面では、ボーヴォワールとサルトルの「絶対的な友愛」で結ばれた自由な「結婚しない結婚」はサルトルが亡くなるまでの51年間続いたこと、疲れ知らずの勇敢なウォーカーで、プロヴァンスやフランスの田舎をバックパックで旅をしながら、執筆活動も続け作品を書き残したこと、さらにボーヴォワールは小説家のネルソン・オールグレンに宛てた3004通の手紙（1947–1963）¹⁰⁾を残していること等々を、ル・ボン氏は明らかにされた。公共の面では、パリの36番目の橋に初めてシモーヌ・ド・ボーヴォワールという女性の名前が付けられたこと（2007年）、「女性の自由のためのシモーヌ・ド・ボーヴォワール賞」が創設されたこと（2008年）、2021年に記念切手が発行されたといった情報も、ボーヴォワールを敬愛する参加者にとって貴重なものであったと推察される。

9) 角田光代『坂の途中の家』朝日新聞出版 2016。内容は、刑事裁判の補充裁判員になったヒロインが、子どもを殺した母親をめぐる証言にふれるうち、いつしか彼女の境遇にみずからを重ねていくというもの。乳幼児の虐待死事件と家族であることの心と闇に迫る心理サスペンス。

10) Simone de Beauvoir, *Lettres à Nelson Algren*, Distribooks Inc, 1999.

(Ⅱ) ボーヴォワールとその著作

1. 中村彩 (リヨン第2大学文学部博士課程・日仏女性研究学会)

「ボーヴォワールにおける小説へのためらい—『離れがたき二人』をめぐって」(La Réticence de Beauvoir envers le roman: autour des *Inséparables*)

中村彩氏にとって、『離れがたき二人』に描かれているザザの劇的な死に対して感じた違和感が今回の発表のモチベーションとなったとのことであった。ボーヴォワール研究の最先端をいく若手専門家は、この違和感を解明すべく、『或る戦後 *La Force des choses*』『娘時代』、『女ざかり *La Force de l'âge*』、短編小説集『青春の挫折 *Quand prime le spirituel*』¹¹⁾、学生時代の日記『青春ノート *Cahiers de jeunesse*』¹²⁾ など膨大な資料を読み解いた。

ボーヴォワールは、『離れがたき二人』をあまり気乗りしないままに書いたという。完成した作品をサルトルに見せると、サルトルは出版するのはどうかと「首を捻った」というが、中村氏は、この作品を世間に公表しなかった要因は、ボーヴォワール自身の「ためらい」にあったのではないかとする仮説に基き、説得力ある論証をされた。

まず、ボーヴォワールは1929年のザザの死から30年間、何度もザザの物語を書こうと試みた事実が明らかにされた。1930年代前半の何編かの未完の作品、ボーヴォワールが30年代後半に執筆し出版社に送ったものの晩年まで出版されることのなかった短編小説集『青春の挫折 *Quand prime le spirituel*』、さらに1954年の小説『レ・マンダラン』¹³⁾の削除された一節において、ボーヴォワールはザザをめぐる物語を何度も語り直していたのであ

11) シモーヌ・ド・ボーヴォワール (著)『青春の挫折』朝吹三吉、朝吹登水子 訳 人文書院 1981 (*Quand prime le spirituel*, Gallimard, 1979)

12) Simone de Beauvoir, *Cahiers de jeunesse 1926–1930*, Gallimard, 2008.

13) シモーヌ・ド・ボーヴォワール (著)『レ・マンダラン』朝吹三吉 (訳)in「現代世界文学全集 第45–46」新潮社 1956 (*Les Mandarins*, Gallimard, 1954, ayant obtenu le prix Goncourt la même année.)

る。

ポーヴォワールが、自身の回想記の『娘時代』（1958）の中で、『離れがたき二人』で語っている内容のほとんどを取り入れながらザザの物語を再構成しているのは言うまでもないが、中村氏は、この物語を回想録として語ることによってポーヴォワールは、ようやく納得のいくかたちでザザについて語ることができた、と指摘された。『娘時代』の刊行をもってザザの物語はポーヴォワールの中で過去のものとなり、今までの葛藤が精算されたのであり、ザザの死というポーヴォワールの人生における衝撃的な出来事こそが「彼女が文学的創作へと向かう動機となったのだと考えることさえ可能かもしれない」のである。

友人の死という出来事を作品で利用すること、さらにそれによってその死を美化してしまうことに対し「ためらい」を感じていたことが、短編小説集『青春の挫折』に収められている4つめの短編『アンヌ』を通して言い表されていることも明示された。『青春の挫折』には、ポーヴォワールの化身であるシャンタルが友人のためではなく自分の利益を考え行動している節が認められるが、それこそがポーヴォワールやサルトルが「自己欺瞞 *mauvaise foi*」と呼ぶものである。友人の死という重いテーマを作品化し、出版することは自己の利益を優先することになってしまう。そこにポーヴォワールの「ためらい」があり、刊行を見合わせた最大の理由があったのではないかと推察されるのである。しかし、ザザをテキスト上で甦らせたいというポーヴォワールの願望と、それにとまなう「ためらい」は、回想録というジャンルを見出すことによって、心理的葛藤を乗り越え、突破口が開かれることとなった。

そうではあるが、小説化したにもかかわらず、ポーヴォワールは『離れがたき二人』を刊行しなかったのである。

とすれば、今年、この作品を出版し世の中の人々の目に晒したことは、著者の意志、その「ためらい」の部分を裏切っていると言えるかもしれないと中村氏は自問する。しかしながら、ザザをめぐる他の作品と「複合的に読み比べる」ことによって、ザザとシモーヌの「二人の関係の別の側面」や「ポー

ヴォワール自身の感情や思いの複雑さがさらに立体的に浮かび上がってくる」のであり、『離れがたき二人』の刊行は同時に、『娘時代』『青春の挫折』あるいは『青春ノート』といった他の作品を読むように、あるいは読み直すようにというボーヴォワールの「誘い」なのではないか、という洞察力に富む文学的な視点をもって、中村氏は結論とされた。

2. 井上たか子（獨協大学名誉教授・日仏女性研究学会）

「人はフェミニストに生まれず、フェミニストになるのだ：『娘時代』『第二の性』『モスクワの誤解』をめぐって」(On ne naît pas féministe, on le devient: Autour de *Mémoires d'une jeune fille rangée*, *Le deuxième sexe* et *Malentendu à Moscou*)

井上氏は、「フェミニストである」とはどういうことか、「フェミニストになる」ために、氏の場合、ボーヴォワールの作品と出会ったことによりどのような影響を受けたかについて、『娘時代』『第二の性』『モスクワの誤解』¹⁴⁾を引き合いに出しながら、明快に論じられた。

まず、井上氏は上野千鶴子の東大入学式で行った有名な挨拶を取り上げられた。そこで言及されたのは、東大の女子学生が自分の所属する大学の名前を告げると「退かれる」というジェンダー現象についてであった。東大出身の井上氏は、60年前にもこれとまったく同じ経験をされたというのである。半世紀以上前も現在も「根本的なものは何も変わっていない」と認識させられたという氏の指摘は、2021年のジェンダー平等指数が120位、政治分野における女性の進出率は153位という数値が示しているように、現在の日本が世界で最低のランクに位置するジェンダー後進国であるという現実を如実に反映していると言えるだろう。

『離れがたき二人』に描かれているカトリックを信仰するブルジョワ家庭の掟によりヒロインが苦しむ描写は決して誇張ではなく、この社会階級の人々にとっては日常のことであった、と井上氏は指摘された。事実、シモー

14) シモーヌ・ド・ボーヴォワール（著）『モスクワの誤解』井上たか子（訳）人文書院 2018 (*Malentendu à Moscou*, L'Herne, 2013, coll. « Carnets »)

ヌが通っていたカトリックの私塾の先生たちにとって「宗教教育をおこなわないリセ（国立高校）は娼婦の家とほぼ同じ」とみなされていたこと、また、シモーヌは父親の破産により教職につく道を選んだが、ブルジョワ階級では「娘が大学教育を受けることはばかげているとされ、職業をもつことは下の階級に墮ちることだ」と思われていたことなどを、ボーヴォワールは実際の自身の体験をもとにして書いた『娘時代』に記しているのである。

さらに、フェミニズムの定義は多様であるが、フェミニズムとは、「女性であることが理由で、抑圧されていることに気づくこと、そして、その抑圧から自分を解放するために努力する勇気をもつこと」であるという氏のフェミニズムの定義には、蒙を啓かれたと感じる参加者がいたことだろう。この定義は、いみじくも、現代の#MeToo運動のフェミニズム精神にも通じるものでもある。

『第二の性』の序章に書かれている「人は女に生まれない、女になるのだ」という文言はあまりにも有名だが、この後に続くボーヴォワールのジェンダー思想の核心をつくのが次の一行であることは、あまり知られていない。すなわち、「社会において／人間の雌〔つまり女〕がとっている形態を定めているのは、生理的宿命、心理的宿命、経済的宿命のどれでもない。〔そうではなくて、〕文明全体が、男と去勢者の中間物、つまり女と呼ばれるもの」をつくりあげているのだという指摘である。この言葉こそが、世界的に大きな反響を呼び、女性開放の先駆的役割を果たしたのだ。

ボーヴォワールの著作を読み解く上で、陥りやすい誤解についての指摘もなされた。つまり、「女は生物学的条件によって規定されていない。女は自由に好きなものになれる」という取り違い、あるいは「ボーヴォワールは母性を否定した」「女は自由に好きなものになれる」といった勘違いについても、丁寧な説明をされた。ボーヴォワールは、女性の生物学的条件を否定してはいないし、女が何にも規定されず、まったく自由な存在であるということではなく、女は、文明全体によって「第二の性」にされているのであり、ボーヴォワールが否定したのは、「産む性」であることを強制されることであって、母性そのものではないのである。女性＝母性という発想こそが家父長制

の思考なのであると井上氏は論じられた。

「女は他者である」という状況がいかに根深いものであるかを肝に銘じること、それが重要なのである。また、「男性による女性支配は終わり、平等は達成されたという神話」があり、実際には男女平等は実現していないにもかかわらず、「女性はもう十分に解放された、女性のほうが強い」といった言説を耳にするが、こうした言説にまどわされることなく、自由に向けての歩みを止めないことが大切だということを、レジャンヌ・セナックの『条件なき平等』¹⁵⁾の翻訳者でもある井上氏は強調するのである。

最後に、『モスクワの誤解 *Malentendu à Moscou*』について、2013年にこの作品がL'Herne社から出版されたとき、日本語訳を出版してくれる出版社を探したが、日本ではボーヴォワールの名前さえ知らない人が増えていて採算が取れない、という理由で引き受けてもらえず、ようやく5年後に刊行に漕ぎ着けたという氏の逸話は、ボーヴォワールを広める緊急性と必要性があることを改めて認識させるものであった。執筆からすでに半世紀以上も過ぎているにもかかわらず、「みずみずしい魅力を保っている」「隠れた佳作」である『モスクワの誤解』を読んで、75歳を過ぎてからフェミニズムに関心を持った方がいると、氏は最後に言及された。

(Ⅲ) ボーヴォワールと現代社会

1. 林香里（東京大学理事・副学長）：「冒頭の言辞」

林香里氏は、まず、ご自身のカトリックの女子校に通学された経験からシスターたちから受けた厳しい教育に言及されながら、カトリックとは関係のないところにも「娘の義務とは自己を消し、自分を犠牲にし、皆に順応すること」をよしとする社会環境が存在すると指摘された。

メディア研究者でおられる林氏は、日本の女性たちを生きづらい状況に追い込んでいるのは、日本のメディアにおける女性のステレオタイプ化やソー

15) レジャンヌ・セナック（著）『条件なき平等 私たちは同類だと想像し、同類になる勇気をもとう』井上たか子（訳）勁草書房 2021 (*L'égalité sans condition - Osons nous imaginer et être semblés*, Rue Echiquier, 2019)

シャルメディアの影響が大きいと警鐘を鳴らす。フェイスブック社は、多くの少女たちがインスタグラムの画像を見て拒食症になるなど、心理的なダメージを受けていることを知っていたにもかかわらず、さらに若い女性用のアプリ開発をしていたことが内部告発された事例を指摘された。女性たちが感じている現代社会の生きにくさこそ、井上氏が指摘された文明の全体がつくりあげた「第二の性」である「女」、すなわち「雄と去勢体との中間産物」を生み出す土壌そのものではないかと強調されるのである。

ボーヴォワールが指摘する状況は、まさに現代の日本の社会システムそのものであり、林氏によれば、この「システムは常に生活世界を支配しており、ユルゲン・ハーバーマスの言葉を借りるなら『植民地化』している状況に置かれている」のである。つまり、女性たちは、たとえどんなに能力を磨き、キャリアを伸ばし成功したと見えても、日本には、まだまだ、政治・科学・経済のシステムと生活世界の間には、深い溝があり、最終的には、女性たちは支配下にある生活世界で従属的立場から脱することが出来ないのである。

林氏が携わっておられる東京大学のダイバーシティのプロジェクトでは、とりわけ東京大学に女性を増やすことを大きな課題の一つとしているが、この目標は達成が困難な見通しとのことである。さらに、科学技術社会論の隠岐さや香教授の調査によれば、1,820人のさまざまな分野に所属する大学教員、研究者、大学院生に対して実施したアンケートの、研究するのに必要な資質は何かという質問に対し、「生まれつきの才能」と応える人の割合が高い分野ほど、女性、およびアフリカ系アメリカ人の割合が少なかったそうである。自分の分野に「生まれつきの才能が必要」と見なしている研究者たちは、「この分野では男性の方が女性よりも高い業績をあげるのに適している」という考えに賛同する人が多く、かつその分野が「女性にとって居心地のいいものではない」と捉える人が多かった事実も指摘された。

また、東大の教員の間で優秀な学生への誉め言葉として、「地頭がいい」という表現があるそうだが、これはまさに、優秀さを「生まれつきの才能」に結び付ける表現であり、それが当たり前のように使われている空間は、「均質的で排他的」であり、「女性に冷たい」と強調された。さらに、中学生

を二つのグループに分けて、一方には「能力は生まれつきのものではなく、成長するものだ」というメッセージを伝えながら数学の授業を行い、もう片方は通常の数学の授業を行ったところ、「能力は成長する」と教え込まれた方のグループにおいて男女ともに成績が向上したとのことである。

現代の多くの女性たちは、「女性として生きる生活世界と、近代社会が成し遂げた科学・政治・経済といった男性的システムという、2つの矛盾した場所の間に引き裂かれた状態」に置かれており、日本社会には女性たちを応援し、優秀な科学者や思想家や経営者として育てようとする公正な基盤をつくる姿勢が欠けており、それは社会的に大きな損失なのである。

林氏は、「女性」という生き方を徹底的に解明したのが「実存主義の哲学者ボーヴォワール」であり、その彼女のおかげで「女性」と「哲学」が結びつき、「生まれながらの性と社会で構成されるジェンダーとを分けて考える第二派のフェミニズム」の扉が開いたこと、また、それによってフェミニズム思想の研究が進み、そのことが政治学、社会学、経済学のみならず、工学、情報科学、心理学をはじめ自然科学の分野にまで強い影響を及ぼしたと指摘され、その意味で「ボーヴォワールは、20世紀の学問のパラダイム転換であったとさえ言える」と力説された。

2. 赤藤詩織（東京大学 東京カレッジ特任助教）

「自らの知と人生における Simone de Beauvoir の影響、その現代的意義」

1980年代後半生まれで「フェミニズム人類学」が専門の赤藤氏は、まず、様々な経済活動や経済政策が、私たちの生活の中で、最も親密な部分、例えば、恋愛や子育てなどに与える影響を研究していると述べられた。

ご自身は、二世代のフェミニストであった祖母と母親に育てられ、カトリックの女子校を経て、インドの高校留学、欧米の大学と大学院で学んだのにもかかわらず、20歳になってようやく、自分がいつのまにか「わきまえる女」となっていたことに気づいたという。表面的には自立しているように見せかけながら、実際には、日本社会が女性に求める「第二の性」を自ら認識しないままに内面化していたからであった。

また、調査によれば、2019年の東大では学生のうち10人のうち8人が、教授10人のうち9人が男性だという。赤藤氏は、様々な経済活動や経済政策が私たちの生活に与える影響を研究する人類学者であるが、欧米で普及しているエアコンは、1960年代にオフィスで働く40歳、70キロの男性をモデルに作られたこと、あるいは、既存のエイジング研究もまた「男性がデフォルト」という環境にあり、女性の活動や視点が欠けているという事実を明らかにされた。赤藤氏は、『第二の性』が発表されて70年以上たった今でも、人を「女性」にする「装置」が世界中いたるところに仕掛けられていると分析された。そして、5、6年前まで、公共の場でジェンダーについて語るのを敬遠していたが、この「装置」のせいで「言葉にできない生きづらさ」を感じていたことを理解したとき、「わきまえる女性をやめ」「フェミニストとして、生き返った」と自らを振り返り、この大きな存在の変容をもたらしてくれたポーヴォワール、そして「ポーヴォワールと同じ精神で日本における女性運動を進めてきた日本のフェミニスト」に感謝の意を表し、発表を締め括られた。

3. 松尾亜紀子（エトセトラブックス代表・編集者）

「フェミニスト運動推進のための書籍の役割と活用」

松尾亜紀子氏は、「エトセトラブックス」というフェミニスト出版社兼書店を営んでおられる。『エトセトラ』（2019年に創刊、これまでに6号を刊行）という女性向けの雑誌の出版人でもある。出版業界を通して生活世界に生きる若い女性読者たちと現実にダイレクトなコミュニケーションをもち、「市民」の立場で現場から語っていることから、松尾氏の発表には、非常に刺激のかつ斬新性が認められた。

まず、女性専用の出版社を立ち上げた理由について、松尾氏は個人的および社会的な観点からフェミニズム書店を設立した動機を挙げられた。個人的な動機としては、以前に勤務していた老舗の文芸出版社で、翻訳書の編集などに関わり、これまで男性中心だった文学を女性視点に置き換えている世界の女性作家の作品に感銘を受けたこと、また、第2の社会的動機としては、

女性に関わる日本社会の大きな変化を目の当たりにしたことにあったと指摘された。

社会の大きな変化としては、まず、2000年代に右派からの激しいバックラッシュがあり、「フェミニズム」「ジェンダー」という言葉そのものが社会全体で使用されなくなり、書店には「人文」の一ジャンルとして「ジェンダー」というコーナーはわずかにあったとしても、「フェミニズム」書が並ぶ風景が見られなかったという。ところが、ここ数年でこうした状況に大きな変化が見られた。時系列で追うと、2010年代はSNSが発達し「10～40代の女性たちが自分たちの日頃の怒り、胸のうちを吐露するようになり、海外からの『フェミニズム』的なイシューを共有しはじめ」、2017年には伊藤詩織さんが自らの性被害を告発し、その後ハリウッドを中心に#MeToo運動が広がった。2018年1月には、「トランプ元大統領に反対するウイメンズマーチ」が起り、韓国でも2016年に既に「フェミサイド」が起っており、新たなフェミニズム運動が拡大していた。

他方、日本社会では、2018年7月に東京医大が女性を一律減点していた不正入試が発覚、2019年3月には父親から子供への長年の性虐待を含む4件の性暴力事件に無罪判決が下された。

これらの日本社会に起きた変化や事件が、日本で初めての、いわば「女性の、女性による、女性のための出版社」と形容してもよいと思われるが、「エトセトラ」書店を立ち上げ、フェミニズム雑誌『エトセトラ』を刊行する強い動機となったのである。また「古今東西のフェミニズム本を集めた書店」には、フェミニズムの理論書、研究書から古典小説、漫画まで『『フェミニズム』を感じさせる本が揃えられているが、そこには、「本でフェミニストの連帯を見せたい」というフェミニスト店主の強い意志が明確に反映されている。

客層は、大学で初めてジェンダーに触れた大学生から、ウーマンリブの頃に活動していた年配の方までと広範の世代にわたり、自身が受けたセクハラや日常における性差別、職場や雇用での差別を受けたからといった理由、あるいは性暴力や差別のニュースを知り、日本のひどい現状に対し「アクティ

ビズム」を始めたいと訪れる女性が多いという。

現代は SNS 全盛の時代であり、そこにコロナ禍が加わったために、インターネットが主な発信や交流の場となっているが、本を読む層は一定数が存在し、特に「これまでのフェミニズムの歴史を知ることが非常に重要」だということを、「フェミニズムに意識の高い若い人がよく知っている」そうである。フェミニスト運動推進のための書籍の役割は、こうした読者の声に答えることにあるというわけである。

竹村和子『フェミニズム』の冒頭の言葉である「結局、問題はあるのだろうか、もしも問題があるとすれば、それはどのようなものなのか、本当に、女というものがいるのだろうか」を思い浮かべる松尾氏は、出版社と書店の活動はフェミニズムの「運動」そのものであると考える。現代の気鋭のフェミニストである松尾氏には、今後もフェミニズム雑誌『シモーヌ』（現代書館）やフェミニズム批評誌『イメディア i+med (i/e) a』と連携し、フェミニズム出版界を先導していく気概があることを予感させる発表であった。

おわりに

本稿は、シンポジウムに登壇された6名の女性たちの発表内容をまとめた報告である。しかしながら、それぞれの講演や発表を正確に捉えられたかどうかは甚だ心許ない。とはいえ、世界の女性たちの心にあれほどまでに響いた「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」という言葉を生んだボーヴォワールが誕生してから、はや一世紀余、このシンポジウムが女性たちの心に灯したボーヴォワールの炎を次世代につなげていくための何らかの機会となったとすれば、主催者の一員として願ってもない幸運なことである。

個人的なことではあるが、筆者も参加者の中におられた方々と同様、学生時代に『娘時代』と『女ざかり』を夢中になって読み、ボーヴォワールとサルトルが来日し空港に着いた時には、その実況放送と演説をラジオで夢中になって聞いた世代である。フランスの哲学者カップルの来日は、それまで「男女7歳にして席を同じゅうせず」の当時の日本社会に多大な影響を与えた。古い社会規範の中で生きていた日本人の男女にとって結婚しなくても

カップルになれるという事実は、衝撃的なことであった。大学のキャンパスには、堂々と手を繋いで歩く男女のカップルの姿が見られるようになり、筆者のいたクラスには実存主義哲学に熱弁を振るう男子学生が現れ、有志のグループが大学祭で『ユイ・クロ』¹⁶⁾をフランス語で上演したりしていた。同時に世間には、ジュリエット・グレコやアズナブールのシャンソンとともに、フランス的な自由な空気が流れ始めた。テレビも新幹線も、もちろん携帯電話もスマホのない時代のことであった。

現代のフランスに視線を移してみると、フランス女性が選挙権を得たのは日本と同じ1945年だったにもかかわらず、2000年に憲法を一部改正しパリテ法を制定したフランスは、その後も次々と女性の権利を拡大する施策を講じ、少子化問題もほぼ解消されている。女性に対する暴力についても、パリでは、2019年7月、DVなどで殺される女性が多いことに反発し「女殺し反対デモ」が起き、フェミニシッド（女性を対象とした殺人）が大きな社会問題となり、マクロン大統領はこの対策のために膨大な国家予算を計上した。日本とは比較にならないほどの厳しい罰則や罰金付きの厳罰や防止措置が犯罪者に課せられている。生殖医療に関しては、2021年6月に国民議会（下院）が独身者および女性同士のカップルに生殖補助医療を認める法案を可決した。不妊症が理由でなくとも、公的保険で人工授精などの施術を受けて子供を持つことが可能となったのである¹⁷⁾。

このようなフランスの女性・家族政策に比べ、女性議員「後進国」の日本

-
- 16) ジャン＝ポール・サルトル（著）『出口なし』in『新潮世界文学 47 サルトル』白井浩司（翻訳）新潮社 1969 (*Huis clos*, s 1945 : 1944年5月27日初演、R. ルーロー演出、ヴィユ・コロンビエ劇場)
- 17) « La PMA pour toutes les femmes est désormais autorisée en France »: <https://www.gouvernement.fr/la-pma-pour-toutes-les-femmes-est-desormais-autorisee-en-france>: 2021年10月15日参照、「フランス、独身や同性カップルの女性に生殖補助医療を適用へ」（毎日新聞 2021/6/9）: <https://mainichi.jp/articles/20210609/k00/00m/030/301000c>: 2021年7月1日参照。「議論開始から立法化まで20年 生殖補助医療法成立はなぜ遅れたか」（毎日新聞 2020/12/7）: <https://mainichi.jp/articles/20201207/k00/00m/040/256000c>: 2021年12月15日参照。

は、「日本版パリテ法」である「政治分野における男女共同参画推進法」を2018年5月に発布したものの、名目ばかりで女性の議員数は増えることがない。2021年6月16日に改定法が公布、施行されたが、国会議員（衆議院）に占める女性の割合は、10%に満たず、世界193カ国中、166位である（2021年1月1日現在¹⁸⁾。

このような日本の現況ではあるが、他方で、2021年2月の東京五輪・パラリンピック組織委員会会長の女性蔑視発言が、ツイッターに「#わきまえない女」のハッシュタグをつけた投稿を膨大な量で拡散させ、女性差別者の処遇の検討を求める署名は14万筆を超えた。2010年代のバックラッシュを経験した日本社会であったが、このように、SNSなどのインターネットを介した次世代の女性たちの力が社会に変容をもたらす希望を与えてくれている。

今回のシンポジウムを通し、第二波フェミニズムの時代を生き抜いた女性たちが母親となって育てた娘や孫の世代の女性たちに、ボーヴォワールの残した哲学・文学思想を確実に継承し、現代日本のフェミニズムの問題に深い関心を持って社会を変えていこうとする強い意志があることを窺い知れたのは、大きな成果であったと思われる。

シンポジウムの後半にフランス側でウェビナー接続の問題が発生し、質疑応答が予定通り行えなかったことは非常に残念だったが、講演および発表のすべてが問題なく視聴できたのは、ボーヴォワールが天国から暖かく見守り応援してくれていたからかもしれない。筆者はボーヴォワールの専門家ではないにもかかわらず、僭越ながら一瞬そんな感覚が頭をよぎった日仏合同シンポジウムであった。

最後に、ご登壇くださった方々をはじめ、このシンポジウム開催のために

18) 日仏女性研究学会は、2022年3月5日（土）、2013年から2019年までオランダ政権下で首相府付き「HCEfh 女男平等高等評議会」のパリテ部門代表を務めたレジャンヌ・セナック Réjane Sénac 氏（シアンス・ポの教員）にご登壇いただき、国際女性デー記念シンポジウム「フェミニズムを再考する—大革命期からパリテまで」（オンライン同時通訳付き）を開催する予定である。

ご尽力をいただいた各団体関係者の方々、同時通訳、ロジをご担当くださった女性たちに主催者の一員として心より感謝申し上げますとともに、ボーヴォワールのフェミニズム思想がさらなる深化を遂げ、女性に不寛容な権力構造や社会システムの根本からの変革を可能とするような新たなフェミニズム思想や運動の誕生を期待し、またそのためにさらなる努力を積み重ねていかななくてはならないことを改めて認識しながら、本報告の結びとしたい。